

福岡工業大学 機関リポジトリ

FITREPO

Title	佐藤一斎の『言志四録』にみる自然から学ぶ人間の在り方生き方
Author(s)	上寺 康司
Citation	福岡工業大学研究論集 第51巻第1号 P29-P39
Issue Date	2018-9
URI	http://hdl.handle.net/11478/1227
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher

Fukuoka Institute of Technology

佐藤一斎の『言志四録』にみる自然から学ぶ人間の在り方生き方

上 寺 康 司 (社会環境学科)

The Way of Being and Living of Human Learned from Nature shown in “Genshishiroku” by Issai Sato

Koji KAMIDERA (Department of Social and Environmental Studies)

Abstract

This paper focused on the way of Being and Living of Human learned from Nature shown in “Genshishiroku” by Issai Sato. This paper consisted of three topics. The first topic showed the learning of the way of construction of the modern human society from the theory of Nature. The second topic showed the contractive relation between Human and Nature. The third topic showed the way of Being and Living of Human learned from the World of Nature.

This paper concluded that the ideal way of Human Being and Living stood for the being of Nature. from the contents of “Genshishiroku” by Issai Sato.

Key words: *Genshishiroku, Issai Sato, human being and living, World of Nature*

1. はじめに

本小論では、先人の思想の中で江戸時代末期の儒学者である佐藤一斎(1772~1859年)の『言志四録』¹⁾に焦点をあて、そこに記された内容から、自然²⁾と人間との関わりが深い内容を抜粋紹介する。そして、それぞれの内容から垣間見ることのできる21世紀現代社会、すなわち高度に発展した科学技術を基盤に構築された文明社会でありなおかつ、変化が激しく、経験値を超えた災害・事変がいつ起こるかもしれない、先行き不透明で、危機と表裏の社会における人間の在り方生き方についての考察を加える³⁾。

自然の営みは、まさに「自然」という言葉通り、違和感がなく、調和的であり、そこに美がある。またその美は「強さ」に裏付けられたものである。しかし自然の景観は一定ではない。その強さには、時として人間を恐怖に陥れる、例えば地震や豪雨といった自然災害に象徴される、「変動」のパワーも内包されている。その「変動」のパワーを時として発現しながら、自然の営みは進んでいく。世界的な建築家の黒川紀章氏(昭和9(1934)年~平成19(2007)年)は、昭和34(1959)年の伊勢湾台風後の人々の復興する力を目の当たりにし、人間には自然の驚異・猛威にさらされ

ながらも、自然とたくましく向き合っていく力を実感し、人間と自然との共生をテーマにした建築を志すに至ったという⁴⁾。

経験値を超えた自然災害との遭遇は、21世紀の先行き不透明な社会を象徴するものである。自然は絶えず変動する。人間の想定をはるかに超えた自然災害による自然の変動に柔軟に耐えうる社会の構築が求められる。

自然の調和的な営みから、自然と共生・共存のできる調和的社会的在り方や、人間の在り方生き方についての示唆を『言志四録』の条文から読み取りたい。

II. 佐藤一斎のプロフィールと『言志四録』

佐藤一斎は、70歳から88歳で生を全うするまで、当時最高峰に位置する学問・教育機関である昌平坂学問所の儒官を努めた人物である。

佐藤一斎(1772年(安永元年)~1859年(安政6年))は、1772(安永元)年、美濃岩村藩の家老の次男として江戸藩邸で生まれた。名は坦(たん、たいら)、字は大道、通称捨蔵^{あきな}と言ひ、一斎は彼の号であった。佐藤一斎は幼少から読書を好み、水泳・射騎・刀槍等の武術にも勝れ、小笠原流礼法も学び、武士として学者としての素養を積んだ。まさに文武両道の体現者であった。孔子、孟子に代表される聖賢の学とされる儒学に専心・専念し、12、3歳ではすでに成

人とかわらぬ学才を発揮し、年を重ねるとともに次第に頭角をあらわしていった。岩村藩主の第3子、すなわちのちの林述斎（1738（元文3）年～寛政5年）とともに、日夜、儒学を切磋琢磨、研鑽した。1805（文化2）年に34歳で林家の塾頭となり、1826（文政9）年、55歳で岩村藩の家老待遇となった。この時期が、佐藤一斎の武士として学者としての大成への出発点といえと筆者は思量する。1841（天保12）年、当時としては長寿の段階である70歳で幕府儒官（昌平坂学問所の儒官）となり、昌平坂学問所の学問と教育を主宰した。昌平坂学問所といえば、当時の教育・学問研究機関の最高峰である。そこでの儒官の役割は、教育・学問を主宰するとともに、学問をもとに江戸幕府の政策のブレーンの役割を果たす。70歳と言えば、21世紀の今日においても高齢者であり、ほとんどの人が社会の一線から退き、第2の人生を送る年齢である。しかしながら佐藤一斎は「七十にして心の欲する所に従えども矩を越えず。」（『論語』為政第二）の体現者のごとく、その重責を精力的にこなし、1859（安政6）年、88歳で生涯を閉じるまで、昌平坂学問所儒官の任を全うしたのである。佐藤一斎は、自らが幕府の正学である朱子学のみにとらわれず、表向き幕府が異端とした陽明学も研鑽したことに象徴されるように、柔軟で広い視野の持ち主であり、複眼的思考により物事を考察した人物であったと思われる。佐藤一斎は儒学者として、儒学の本旨である「修己治人」の学の探究・体認を志したのであるが、「治人」、すなわち人を治める「政」に関しては、自らの学者としての分を守り、政治への舞台に躍り出ることにはせず、武士に対する教育または、江戸幕府の関係者、藩主たちと学問を通しての交際を通じた、社会に対する貢献を自らの任ととらえていた。そのため、歴史の表舞台には登場していない。

『言志四録』は、佐藤一斎が42歳から82歳までの41年間に著した随想録である。この『言志四録』は、孔子、孟子を始めとする中国の先人の思想を随所に引用した随想録であるが、近代明治以降、今日まで日本人としての「修養」の書としてとらえられ⁹⁾、21世紀の現代社会においても、様々な分野で活躍する人間の在り方生き方の糧として活用されている⁹⁾。

『言志四録』は、江戸時代の漢学者の中で一番文章がうまいとされた佐藤一斎の修養・工夫からにじみでた4篇（『言志録』『言志後録』『言志晩録』『言志耄録』）あわせて1133条からなる随想録である。この『言志四録』は西郷南洲（隆盛）を始めとする多くの維新の志士たちに愛誦された。特に西郷隆盛は、会心の101条を抜粋し、抄録し、絶えず座右におき、自らの行動の指針とした。『言志四録』は直接間接に明治維新の原動力であったとの指摘もみられる⁷⁾。

『言志録』（1824（文政7）年刊）は、佐藤一斎が42歳（1813（文化10）年）から52歳の11年間をかけて、執筆した246条からなる随想録である。時代は第11代将軍徳川家斉の全盛期であった。この『言志録』については、公にする

前に、門下の秀才に提示してその意見を求めた。一斎門下の秀才たちは、意見を述べ、それに対して一斎は答えたとされている⁸⁾。ここに、公にするにあたっての佐藤一斎の「慎重さ」をうかがい知ることができる。

『言志後録』（1850（嘉永3）年刊）は佐藤一斎が57歳から66歳の10年間をかけて255条を執筆したものである。この『言志後録』の内容から、佐藤一斎がこの書を執筆した10年間は、まさに佐藤一斎の人生における真の意味での「鍛」の時代であったと思われる。その「鍛」の結実成果を筆録したのではないかと筆者は思量している。

『言志晩録』（1850（嘉永3）年刊）は佐藤一斎が67歳から78歳の12年間をかけて292条を執筆したものであり、円熟味を帯びた内容が散見される。この『言志晩録』の内容から、この執筆された12年間は、まさに佐藤一斎の人生における「錬」の時代であったと、筆者は思量している。

『言志耄録』（1853（嘉永6）年刊）は80歳を意味する老いに至るの「耄」の文字が象徴しているように、佐藤一斎が80歳の時に起稿し、2年間かけて340条を執筆したものである。枯れた内容の中に美しさの醸し出る文章が多くみられる。まさに佐藤一斎の人生における「磨」の時代であったと筆者は思量している。江戸後期の画家であった椿椿山（1801（享和元）年～安政元（1854）年）による佐藤一斎自讃画像⁹⁾からも推察されるように、佐藤一斎にとって、人生まさに80歳を過ぎてからが、人生の総仕上げとして人間を磨きあげる時代であったといえるだろう。

この1133条からなる『言志四録』は、「一斎の人と学の結実精華」であり、「一斎の学風人格はこの書によって知ることができる。」との評価もある¹⁰⁾。

III. 『言志四録』にみる人間と自然との関わり

佐藤一斎の著わした『言志四録』中から、現代の人間の在り方生き方や社会の営みに有益な示唆を与える条文を抽出し、それらを3つの枠組み、すなわち1.自然の理から学ぶ社会の在り方、2.自然と人間との対比的関係、3.自然の営みに学ぶ人間としての在り方生き方、に分類し、考察を加える。

『言志四録』の条文については、白文と読み下し文を合わせて記述し、大意をふまえて考察を行う。

1. 自然の理から学ぶ社会の在り方

本節では自然の理を象徴する『言志四録』の条文を抜粋し、自然と人間社会の共生・共存・調和にかかわる考察を行う。取り上げる条文は、『言志耄録』第69条、『言志後録』第124条、『言志耄録』第84条、『言志録』第93条、『言志後録』第26条、『言志録』第206条である。

1) 「能変」と「無変」及び「常定」と「無定」

：天地間（＝自然）の活道理

【能變。故無變。常定。故無定。天地間都是活道理。】

能く変ず，故に變無し。

常に定まる，故に定無し。

天地間，都て是れ活道理なり。（『言志叢録』第69条）

自然は絶えず変化している。その変化の中でも常に定まっている。四季折々の変化性も日常性の中にある。どんな状況においても常に定まっているからそれ自体定まっていない。どのような時でも変わらず定まっている。

人間は、日々成長発達しながら生きている。また、体内においても目に見えない変化が絶えず起こっており、その中で人間は生きている。人間が意識的に行動することもあるが、無意識の中での人間の生理的な変化また精神的な変化も見られる。「能変」のなかの「無変」，「常定」のなかの「無定」，この表裏の関係の中で人間は日々存在し、生きている。変化の激しい社会で生き抜いていくためには、この条文にみられる「定」と「変」の本質を理解した上で、不易性と流行性の調和的受容の中で力強く生きていくことが肝要であろう。人間は自然環境の中であって、「能変」の中に「無変」を、「常定」の中に「無定」を見だし、自らの生を育てていくことが求められよう。

換言すれば、変化の激しい社会に対応し続けることは、変化の激しい社会の中での「安定」の状態であり、それがひいて言えば「成長」の営みといえるのである。つまり、変化の激しい社会の中で成長し続けることが「安定」を担保することにつながるのがある。

2) 「山嶽」の「静中動」と「川流」の「動中静」

【山嶽亦不舍昼夜。川流亦寂然不動。】

山嶽も亦昼夜を^お舍かず。川流も亦^{じやくぜん}寂然として動かず。

（『言志後録』第124条）

山嶽は、昼も夜も動いて草木を生じさせ、岩石を変化させている。山嶽は「静中動」の象徴的存在といえる。川流もまた昼夜絶え間なく動いているが、川自体は寂然として動かない状態、「寂然不動」である。すなわち川流は「動中静」の象徴的営みといえるであろう。

動かないように見えて変化すなわち流行があり、動いている中に不易がある。世の中の営みはこのようのものであろう。流行にはしっかりと対応しながら、そこに内包されている不易性を十分に察知していくことが大切であろう。

3) 「天地間（＝自然）の事物」：「配合の理」

【天地間事物。必有配合之理。

有極陽者出。必有極陰者來配。人之與物皆然。】

天地間の事物には、必ず配合の理有り。

極陽の者出づる有れば、

必ず極陰の者来たりて配する有り。

人の物と、皆然り。（『言志叢録』第84条）

「天地間の事物」には「配合の理」，すなわちつりあうものがあるという道理がある。人についても物についても「天地間」すなわち自然の事物の「調和」が肝要である。

人間社会で言えば、とても陽気な積極的な人が現れたら、必ずその対極に位置するような陰気というか控えめで受け身的で消極的な人も現れる。多種多様な人が混在する中で、人間社会は調和的に展開していく。つりあい、バランスが自然界にも人間の世界にも求められる。「天地間」の「配合の理」を人間は、肝に銘じ、自然との共生、他者との共生を図るべきであろう。世の中、社会、組織は、「配合の理」で成り立っているといっても過言ではないであろう。

4) 「安排」^{あんぱい} 仮らざる宜しき「布置」^{ふち}

【布置得宜而不假安排者。山川也。】

布置^{ふち}宜しきを得て、而も安排^{あんぱい}を仮らざる者は山川なり。

（『言志録』第93条）

配置がうまくいき、しかもそれが「安排」^{あんぱい}すなわち人為的な配置でないものが山や川に象徴される自然の状態である。自然の摂理に応じた自然な配置こそ調和的な状態であろう。そこに自然の美しさが醸し出される。自然には美・調和＝自然の「力」がここにはみられる。自然の営みは、おさまるところにおさまる。人間も布置よろしき自然の営みに人間による「安排」を調和させることが肝要である。人間にとっては自然の驚異でも、それは自然にとっては、おさまるべきところにおさまる「布置宜しき」活動である。人間が自然と対話し、「布置宜しき」自然との調和的「安排」が求められる。堤防の建設、川幅の拡張、川底の深化等の営みにも調和的な「安排」が求められる。

この短い条文の中に、自然の雄大さ、力強さ、人為の及ばない崇高性、等がみられる。人間の内面の自然性として学ぶべきものが多い。

5) 「造化之跡」：「事無き所」

【静観造化之跡。皆行其所無事。】

静に造化の跡を観るに、皆な其の事無き所^やに行る。
 (『言志録』第17条)

天地万物を造る自然の理のもとに、静かに万物が創造・化育された跡を観てみるなら、皆、無理のない自然な方法でおこなわれている。「造化の跡」はまさに「事無き所」である。天地万物を造る自然の理である「造化」の営みに学び、自然の営みとの調和を図る。自然の営みはおさまるところにおさまる。災害によって自然の様子が変わったならば、本来はそれと調和するように、人間が安全に安心して生活を営めるような基盤の構築を進める必要があるであろう。

6) 「人世」=「坤輿の文」(自然のコントラスト)

【山水之可遊可観者。

必是暈嶂攢峰。必是激流急湍。
 必是深林長谷。必是懸崖絶港。
 凡其紫翠蒙密。雲烟變態。遠近相取。
 險易相錯。然後有靈致耐賞。
 最見坤輿之爲文。若唯一山有一水而已。
 則何奇趣之有。人世亦猶是。】

山水の遊ぶべく観るべきものは、
 必ず是れ暈^{じょうしょうさんぼう}嶂攢峰、必ず是れ激流、急湍^{きゅうたん}、
 必ず是れ深林、長谷、必ず是れ懸崖、絶港^{けんがいぜつこう}なり。
 凡そ其の紫翠^{しすい}の蒙密^{もうみつ}、雲烟^{うんえん}の変態、
 遠近相取り、険易相錯^{まじ}りて、
 然る後に幽致^{こんよ}の賞するに耐へたる有りて、
 最も坤輿^{こんよ}の文たるを見る。
 若し唯だ一山有り、一水有るのみならば、
 則ち何の奇趣か之れ有らむ。
 人世も亦猶^{かく}ほ是のごとし。(『言志後録』第26条)

「暈嶂攢峰」すなわち幾重にも連ってそそり立つ山々や「急湍」すなわち早瀬、「絶港」すなわち人里はなれた入り江、「紫翠の蒙密」すなわち紫や緑の草木に包まれた山や「雲烟」すなわち雲や霧、等が遠きと近きとにわたりコントラストをなす。そしてけわしいところと平坦なところがまじりあう。「幽致」すなわち幽玄な影色が観られ、「坤輿の文」すなわち自然のおりなすあやなどはめづらしい風趣(奇趣)である。

自然景観が人間に感動を及ぼすのは、自然の「布置」のコントラスト、メリハリである。これは人為的に自然を作り出す日本の伝統的な庭園づくりや盆栽等にも象徴されて

いる。また書道の世界においても書を引き立てるための「余白」と書の関係性にもみられるであろう。ここに自然の営みが人間世界の営みに共通している部分を読み解くことができよう。味わい深い幽玄なる自然の景観が、自然の多様性・メリハリの調和によって生み出されていることと、安定的で豊かな社会が、多様な人間の多様な役割の調和によって保たれていることを示唆していると思われる。

7) 万物相待ちて用を為す：万物一体

【萬物相待爲用。不能相兼。是亦其所以爲一體。】

万物相待ちて用を為し、相兼ねる能はず。
 是も亦其の一体たる所以なり。

(『言志録』第206条)

自然の営みは、それぞれに他と支え合い、それぞれが他の代用をする、相互補完関係を切り結び、また万物一体となって有益な状態を保っている。自然の営みの強さは、天地の一体化の中に万物が化育され、それぞれの営みの総和がまた調和を生み出しているといえるだろう。人間社会にも同様のことが言えるであろう。人間がそれぞれの個性を生かしながら、他の人間との調和を図り、共生・共存を図ることが求められる。

2. 自然と人間との対比的関係

本節では『言志四録』から、自然の強さ及び間違いのない裏表のない「誠」の姿と、人間が、弱くもろい存在ゆえに「誠」を探求するための手段として「敬」(他者に対するうやまいと自らに対する慎みの精神)を求める姿を、対比的に表現している条文を抜粋し、その内容をもとに、人間の在り方生き方に関する考察を行う。

本節で紹介・考察する条文は、『言志録』第4条、『言志後録』第94条、『言志叢録』第233条、『言志叢録』第87条である。

1) 「天道」の運：「漸」「人事」の変：「漸」

【天道以漸運。人事以漸變。必至之勢。
 不能卻之使遠。又不能促之使速。】

天道は漸を以て運^{めぐ}り、人事は漸を以て変ず。
 必至^{ひつし}の勢なり。之れを却^{しりぞ}けて遠ざからしむる能はず、又之れを促^{すす}して速^{すみ}かならしむる能はず。

(『言志録』第4条)

天道、すなわち自然の営みも、人の世の中の営みも、「漸」、すなわち、変化の過程が眼に見えぬくらいに、徐々に、じ

わじわと変化を遂げていく。この営みが自然の摂理であり、また人間世界の摂理であり、この営みの動きに逆らうことはできない。この「漸」をないがしろにせず、尊重し、特に自然の「漸」との調和を図りながら、あせらずたゆまずに精進努力を重ねていくことが人間にとっては肝要であろう。「漸」の意味合いには「待つ」ことも含まれているように思われる。

2) 「天」(=自然)の理：「固」 「人」の「理」：「脆」

【以天而得者固。以人而得者脆。】

天を以て得る者は固く、人を以て得る者は脆し
 (『言志後録』第94条)

自然の道理によって得たものは堅固なものであるが、人為や知謀の駆使によって得たものは脆いものである。自然の営みを人間の力で押さえたり、変更したりするには限界がある。調和を図り共存共栄を果たすことが必要となるであろう。自然の調和的営みは強く、人間の営み(人間が自然の上に造ったもの)は脆弱である。人工物は永久不滅ではない。これは、人間自身の人間力にもあてはまる。また人間の人為的な力の結集である高度文明社会も、永久不滅のものではなく、盤石に見えてそれにたより過ぎしまうと、自然の力によってろくも崩壊され、人間は路頭に迷う。高度文明社会の象徴であるコンピュータ制御による社会も、コンピュータのシステムに不具合が生じる時も多々あり、絶えずバッファを備えておくことが必要なのである。極論すれば、高度文明社会が自然の営みの結果として崩壊してしまっても、その中でも自然と調和して、まさに自然の構成員たる人間として、原始自然社会でも、人間らしく知恵を発揮して生き抜いていくことが求められるのである。

後一つ加えるならば、人間の「心の脆さ」をあげておきたい。組織の中心として活躍し、組織を運営している人物に対して、周りの人間はその人物が鋼のような強いメンタルの持ち主であると信じて疑わないことが多い。しかしながらちょっとしたことで躓いてしまい、それによってメンタルが崩壊し、組織から去ってしまうこともある。たよりにしていた人物のメンタルが意外と弱かったということを経験することは、日常において多くみられる。人間の心は脆いものなのである。

3) 「天」(=自然)：不測にして可測 「人」：可測にして不測

【天不可測。而或可測。人可測。而或不可測。】

天は測る可からずして、而も或いは測る可し。

人は測る可くして、而も或いは測る可からず。

(『言志叢録』第233条)

自然現象は、測ることはむずかしいとはいえ、雲行きや雨風の影響等からもその変化を推し量ることは可能である。人間の営みについては推し量ることが可能な場合が多いが、しかし時として人間の予想を超える展開となる場合もある。自然の動き、天候、地震等は予測不能なようであり予測可能である。たとえ予測できなくても、現象化したことに納得する。仕方ないと。それは、『中庸』(第20章)に「誠者天之道也」(誠は天の道)という一節があるように、「天の道」として表現される自然の営みは、嘘偽りのない「誠」を象徴する「至誠の作用」であるからであろう。

一方、人間に関係することについては予測可能なことが多いが、自由意志をもつ人間一人一人の行動について、予測不可能な場合や結果(人間の引き起こす突発的な事件など)に愕然としてしまうことが時としてある。人間の心は複雑であり、自らを欺き、他者を欺くことがあるからである。また欺かないとしても、複雑な人間の心を読むことは難しい。人間を個々別々に本質的に理解することは困難である。そこでどうすればよいのか、それは、自然の営みを手本とした「至誠の作用」を体現できるように自己の改善・向上・変容を図ることであろう。しかしこれは容易なことではなく、禅の世界では、「悟り」の境地に達した人間のみ可能なことであろうと思われる。とは言うものの、ただ諦観するのではなく、一般の人々でも、日常生活において、人間のより良い在り方生き方をめざし、自己の人間としての本体を形成すべく、日々精進努力することは必要であろう。「至誠」を目標として、「勿欺」(欺く勿れ)(『言志叢録』第162条抜粋)に簡潔に表現されているように、自らを欺かず、他者を欺かない在り方生き方を日々心がけることが肝要であろう。また言葉を換えて言うならば、佐藤一斎と生きた時代を同じくし、かつ西郷隆盛が薫陶を受けた薩摩藩主島津斉彬(1809(文化6)年~1858(安政5)年)が座右の銘にした「思無邪」^{よこしま}(思い邪無し)を肝に銘じて、日々の生活を営むことが肝要であろう。

4) 「寒暑榮枯」：「天地之呼吸」

「苦楽榮辱」：「人生之呼吸」

【寒暑榮枯。天地之呼吸也。苦楽榮辱。人生之呼吸也。即世界之所以為活物。】

寒暑、榮枯は、天地の呼吸なり。

苦楽、榮辱は、人生の呼吸なり。

即ち世界の活物たる所以なり。(『言志叢録』第87条)

「寒暑榮枯」は「天地之呼吸」すなわち自然の呼吸であり、「苦楽榮辱」は「人生之呼吸」である。呼吸は人間の生と

切っても切り離せないものである。

地球は「活物」である。地球上のすべてのものが、この世のすべてのものが生きていることの証拠が「寒暑」「榮枯」などにみられる。人間もこの地球上の、自然の「活物」である。人生は「苦楽」「榮辱」の繰り返しであり、まさに「人生の呼吸」である。それを甘んじて受けながら、人間は前向きに逞しく生き抜くことが肝要である。

地球上では、いたるところで地震や火山噴火が頻発している。言うまでもなく我が国日本は「火山列島」「地震列島」であり、地震と相まみえるように火山の噴火が起こっている。人間にとって地震や火山の噴火は驚異である。高度に発達した文明（科学技術）をもってしても、火山の噴火や地震を阻止することはできないし、被害を最小限にとどめることもままならない状況である。やはり原始社会に生きた人間と同様に、高度に発達した文明社会に生きる我々現代社会の人間も、火山噴火や地震活動を「天地の呼吸」、自然の呼吸ととらえて、発生に対する必然性を認識し、いつ何時、自然災害が発生しても、それに対して対応できる心の準備と、常日頃の備えを怠らずにしておくことが肝要であろう。「危機は日常の風の中に在り」「危機は必然である」という言葉を肝に銘じつつ、前向き・積極的に生きることが肝要であろう。そのための工夫が自然の在りようを手本とすることであろう。

3. 自然の営みに学ぶ

人間としての在り方生き方

人間は、人間の違和感のない調和のとれた状態を、既に述べたように、「自然」という言葉で表現していることに端的に表れているように、自然の様子（状態）や営みに、人間としての在り方生き方の範や理想を求める。

本節では、佐藤一斎の『言志四録』の中から人間としての在り方生き方の範や理想を自然の様子や営みに求めている条文を抜粋・紹介するとともに、考察を加える。抜粋・紹介する条文は『言志録』第18条、『言志晩録』第222条、『言志録』第28条、『言志録』第92条、『言志録』第124条、『言志後録』第155条、『言志録』第171条、『言志叢録』第85条、『言志後録』第33条、『言志後録』第85条、『言志叢録』第282条である。

1) 「凡事到妙處」：「自得天然形勢」

【凡事到妙處。不過自得天然形勢。此外更別無妙。】

およ ^{みょうじょ} 凡そ事の妙 ^{いた} 処に到るは、
天然の形勢を自得するに過ぎず。
此の外 ^{ほか} 更に別に妙無し。 （『言志録』第18条）

およそ何事において「妙処」すなわちはなはだ優れてい

る境地にいたるには、自然の成り行き・営みを自得することにつきる。達人の域は、その「道」を自然に行うことにある。達人の技には、自然の営みを参考にしたものが多い。達人の技は理に適ったものであり、それはまさに自然な動きであり、ムダがなく美しい。自然との調和が奏でるものと思われる。達人は自然体で物事をなすことができる。すなわち肩の力が抜けて、無駄が無く、スムーズに事が展開される。「事 ^{みょうじょ} の妙処」への到達とはまさに「天然形勢」の自得である。この「天然形勢」の自得は、言葉を換えれば「忘」の境地に至ることであると思われる。「忘」の境地とは岡田武彦氏によると「磨き、磨き、磨いて忘れ、そして実践し、実践し、実習し、実習して、習うことも忘れてしまう」状態であり、「すべてが人間の技を超えて、天然に自然になっていくこと、「人間の意識を超えて技が自然に行われるようになる」ことであり、つまりは「磨き、実践し、実習することで大切なものが自分に身に付く」ことである¹²⁾。この「忘」の状態から「美」も生まれてくる。「美」は「内に充実したものが外に現れている」ものである¹³⁾。柳生但馬守宗矩の著した『兵法家伝書』にはつぎのような一節がある。「道とて、何にても一筋是ぞとて胸にをかば、道にあらず。胸に何事もなき人が道者也。鏡の常にすんで、何のかたちもなき故に、むかふ物のかたち何にても明（あきらか）なるがごとし。道者の胸の内は、鏡のごとくにして、何もなくて明なるが故に、無心にして、一切の事一（ひとつ）もかく事なし。是只平常心也。」¹⁴⁾道者とは佐藤一斎の述べている「事の妙処に到る」者で有り、平常心にて達人の域に達している者である。

また「勝に不思議の勝あり。負けに不思議の負けなし。」¹⁵⁾という、平戸藩主で心形刀流の達人でもあった松浦静山（1760（宝暦10）年～1841（天保12）年）の言葉がある。これは彼の著した『常静子剣談』にみられる言葉である。剣術においても勝利を得るのは「平常心」にて執り行う故に、勝利を思わず得ることになるのであろう。平常心は、達人が自得した深遠かつ複雑で体系化された道を簡素に集約した心の状態であり、心の自然体、心の「天然形勢」の自得とも言えるであろう。ここに岡田武彦氏による「日本文化は表現が非常に簡素であって、内面的な精神が非常に豊富で深遠」であるとの指摘が当てはまるであろう¹⁶⁾。

江戸城の無血開城に貢献した勝海舟（1823（文政）6年～1899（明治32）年）が、講道館の下富坂道場の落成式に出席し、その場で柔道の創始者である嘉納治五郎（1860（万延元）年～1938（昭和13）年）師範が演じた柔道の形に感嘆の意を著し、「無心而入自然之妙、無為而窮変化之神」（無心にして自然の妙に入り、無為にして変化の神を極む）と、そのときの心境を揮毫している¹⁷⁾。この勝海舟の「自然之妙」の言葉からも、嘉納治五郎が「天然の形勢を自得」した柔道の達人であったことが指摘できよう。

- 2) 重い「石」：「不動」の象徴
 深い「根」：「不拔」の象徴

【石重。故不動。根深。故不拔。人當知自重。】

石重し、故に動かず。根深し、故に抜けず。
 人は當に自重を知るべし。

（『言志晩録』第222条）

重い石は「不動」の象徴であり、深い根は「不拔」の象徴である。石は重い。それ故に動かない。根は深く張っている。それ故に容易に抜けることはない。人はこれらの石、根の有り様を範として、「不動」・「不拔」（不屈）の精神をもち、自らの行いを慎み深くし、軽々しくふるまうことがないようすることが望まれる。「学ぶ」ための自覚・覚悟・決意を自然の在り様を例にして示している。「学び」に対して、不動の姿勢をとり、大きくて重い石のように、どっしりとして揺るがず、大木の根が地中深くまで張り、風雪に耐えるように構える。そうすば、「学ぶ」ための覚悟と決意は、しっかりと固まり、そして物事に取り組んでいくための姿勢態度が形成される。まさに自分の行いを慎んで、軽々しくふるまわない「自重」の精神が涵養される。

- 3) 纒かな「誇伐」の「念頭」
 : 人間の天地（＝自然）と異なる所

【纒有誇伐念頭。便與天地相似。】

纒かに誇伐の念頭有らば、便ち天地と相似ず。
 （『言志録』第28条）

少しでも誇り高ぶる気持ちや相手を打ち負かそうとする気持ちが念頭にあるのであれば、自然を理想とする「誠」を尽くした生き方とは似つかないものとなる。花はきれいに咲いても、また鳥は美しくさえずっても、それを自慢することはない。高い山の険しい崖のところには咲いている美しい花でも、誰にも知られずに咲き、誰にも知られずに散っていく。自らの季節がめぐってきた時に自らの本分をただ粛々と全うするのみである。「傲」の一文字がみられない。他者よりすぐれていることに対して勝ち誇ったり、自慢したりするのは人間のみである。そのような勝ち誇りや自慢、慢心が心にやどれば、人間が理想とする天地の在り方、すなわち自然の在り方とはかけ離れてしまう。また自然は不平不満を言わない。自分が「偉い」と思ったら「奈落」である。自然の営みは「誠」の象徴であり、謙虚に過ごすことが大切である。

人間の成長には「纒かに」も「誇伐の念」のない「謙虚な心」が必要であり、「謙虚な心」を持つことは、絶えず自己改善・自己変容・自己向上を求める専門職に強く求めら

れよう。自然の有り様・営みは、人間の在り方生き方の手本とすべきものである。自然は威張らない。文句をいわない。不平不満を口にしない。自然の摂理の前で粛々とかつ前向きに対応する。

人間の謙虚さは、平常心と似ているところがある。どのような状況においても謙虚さを失わないためには、「泰然自若」の姿勢が求められるのであり、人間が組織の中においても、深山幽谷に咲く、希少な美しい花のごとく、「幽谷自芳」の姿勢が求められるのである。

- 4) 内面の入念な準備とその時宜を得た発露

【薄於不得已而後發諸外者。花也。】

已むを得ざるに薄りて、
 而る後に諸を外に発する者は花なり。

（『言志録』第92条）

やむにやまれる勢いにおかれて、内にあるものを外に発するのが花である。花は、目にみえないなかでも準備をしている。たとえば桜である。寒い冬の時期に、外面では葉を落とし、変化の無い状態に見えても、内面では、粛々と着実に花を咲かせる準備を進めている。そして、時期が来たら花を咲かせ、自らの短命に泣き言もいわず、潔く散っていく。自らを「鍛え・錬り・磨き」、入念な準備をし、「忘」の境地に達したとき、知らず知らずの間にも、物事の成就達成がなされる。桜の花が満を持して、一気に咲き誇る様子には、万全な準備のもとに事に臨むことの重要性が看取される。桜の花の開花にむけての準備は、「少にして学ばば、則ち壯にして為す有り。」（少而學。則壯而有爲。）（『言志晩録』第60条 抜粹）の一節にみられるように、人生における「少」の時代の「学び」に匹敵するであろう。

- 5) 「雲烟」・「風雨」・「雷霆」の営み：「至誠の作用」

【雲烟。聚於不得已。風雨。洩於不得已。
 雷霆。震於不得已。斯可以觀至誠作用。】

雲烟は已むを得ざるに聚り、
 風雨は已むを得ざるに洩れ、
 雷霆は已むを得ざるに震ふ。
 斯ち以て至誠の作用を観るべし。

（『言志録』第124条）

雲や霞は已むにやまれぬ作用によってあつまり、風は已むにやまれぬ作用によって大地に降り注ぎ、かみなりは已むにやまれぬ作用によってふるえ響く。この已むにやまれぬ意図せざる自然の作用に「至誠の作用」が看取される。雲烟（雲と霧）、風雨、雷霆（かみなり）といった自然の気

象は、「已むを得ざる」営み、やむにやまれぬ働き、敷衍するならば「欺かざる」営みとしての「自彊不息」の営みであり、そこに「至誠の作用」が観られる。至誠の作用とは、つまり、自然の作用にみられる「自ずからなる」作用である。「至誠の作用」は『中庸』第25章にみられる「故に至誠は息むこと無し」（故至誠無息）に通じる。人間は、この「至誠」すなわち「自彊不息」を象徴する自然の営みを人間の理想的な在り方生き方として、特に道德性の涵養のための範とすることが肝要であろう。

6) 「山」「水」の有り様から

人間の在り方生き方を学ぶ

【仰観山。厚重不遷。俯見水。汪洋無極。

仰観山。春秋變化。俯見水。晝夜流注。

仰観山。吐雲呑煙。俯見水。揚波起瀾。

仰観山。巍隆其頂。俯見水。遠疏其源。

山水無心。以人爲心。一俯一仰。莫非教也。】

仰ぎて山を觀れば、^{こうじゅう}厚重にして遷らず。
俯して水を見れば、^{おうよう}汪洋として極りなし、
仰ぎて山を觀れば、春秋に變化し、
俯して水を見れば、晝夜に流注す。
仰ぎて山を觀れば、雲を吐き煙りを呑み、
俯して水を見れば、波を揚げ瀾を起す。
仰ぎて山を觀れば、^{たか}巍として其の頂きを隆くし、
俯して水を見れば、遠く其の源を疏く。
山水に心無く、人を以て心と為す。
一俯一仰、教えに非ざるは莫きなり。

（『言志後録』第155条）

仰いで山を觀て、俯して水を見る。じっくりと見ていると人間の在り方生き方に有益な教えがそこには内包されていることに気づく。まず山の「厚重」さ、すなわち重なり合いどっしりとした様や水の「汪洋」さ、すなわち水の深くて広い様、これらは人間としての在り方生き方の範を構成する要素となりうるものである。人間は、緑にふれ、自然にふれることにより、自然の営みから人間の在り方生き方を学ぶ。人間は、自然によって育まれる。心を洗う。人間は、緑深い山のように、何が起こってもどっしりと不動の身体と平常心で臨みたいものである。加えて人間は、海や湖のように広さと深さを兼ね備えた心を持つことも、求められよう。

山は春秋に色取りを変化させ、恵をもたらす。川を流れる水は晝夜をおかず、弛むことなく、爾々と流れ注いでいる。山が雲や霞の間にその雄々しい姿を出没させる。海や川では時として波を高く上げ、また氾濫を起こす。山は、その高い姿を雄々しく、そして毅然として、また肅然として、そびえ立っている。そこからは凜とした趣きも感じら

れる。川の水遠を源とし、途切れることなく、涸れることなく水を注いでいる。まさに「自彊不息」の自然の営みを象徴している。これらの自然の営みから人間は多くのことを学ぶ。特に人間の内面に影響を受ける。自然は何も語らないが、そこにみられる営みに人間の心が動き、多くの教えを見いだすことになる。

7) 「天道」・「風雨霜露」（＝自然の営み）から 人間の在り方生き方を学ぶ

【吾俯仰而觀察之。

日月。昭然掲明。星辰。燦然列文。

春風。和燠宣化。雨露。膏沢洽物。

霜雪。氣凜然肅。雷霆。威嚇然震。

山嶽。安靜不遷。河海。弘量能納。

谿壑。深不可測。原野。廣無所隱。

而元氣生生不息。斡旋於其間。

凡此皆天地一大政事。所謂天道至教。

風雨霜露無非教者。人君最宜體此。】

吾れ俯仰して之れを觀察すれば、
日月は昭然として明を掲げ、
星辰は燦然として文を列し、
春風は和燠にして化を宣べ、
雨露は膏沢にして物に洽く、
霜雪は氣凜然として肅に、
雷霆は威嚇然として震ひ、
山嶽は安靜にして遷らず、
河海は弘量にして能く納れ、
谿壑は深くして測るべからず。
原野は広くして隠す所無く、
而も元氣は生生して息まず、其の間に斡旋す。
凡そこれ皆天地の一大政事にして、
所謂天道は至教なり。
風雨霜露も教に非ざる無きもの、
人君最も宜しく此れを体すべし。

（『言志録』第171条）

この条文では自然の「日月」、「星辰」、「春風」、「雨露」、「霜雪」、「雷霆」、「山嶽」、「河海」の有り様を、人間の理想的な在り方生き方に有益な示唆を与えるものとして表現している。

「日月」は「昭然」、すなわちあきらかな様相を呈し、その本質を象徴するのは「明」である。「星辰」は「燦然」、すなわちきらきらと光る様を呈して「文」をなしている。「春風」は「和燠」、温和な様を呈しており、地上のあらゆるものを「化」する、すなわち変化をもたらして育てあげる。「雨露」は「膏沢」を与える、すなわち湿潤油がものを湿らすように万物に万遍なくめぐみを施す。「霜雪」は気が「凜

然^{ぜん}すなわちぴんと張りつめた状態であり、「肅^{しゆく}」を想起させる。「雷霆^{らいいてい}」は「威^{いかい}」が勢い盛んな「嚇然^{かくぜん}」とした状態であり、「震^{うづ}」である。「山嶽^{かかい}」は「安静^{いせい}」な状態を象徴し、どっしりと構えた状態、すなわち「不動^{ふどう}」であり、どこにも遷^{うつ}らない。「河海^{かかい}」は能く納れる「弘量^{こうりやう}」を象徴している。深い谷である「谿壑^{けいがく}」は測ることのできない「深^{ふか}」、すなわち度量が広いことを象徴している。「原野^{げんや}」は物を生成させる根源の気としての「元氣^{げんき}」であり、万物の営みをほどよく調和的にとりもつ斡旋^{わくせん}の役割を果たす。

このように「天道^{てんたう}」は「至教^{しけう}」、すなわち人間としての在り方生き方の偉大な教えに外ならない。「風雨霜露^{ふううそうろう}」も人君の体得すべき「教^{けう}」である¹⁸⁾。

8) 「風雨霜露」(自然の営み)が人間形成に及ぼす影響

【春風以和人。雷霆以警人。霜露以肅人。
氷雪以固人。風雨霜露無非教。謂此類也。】

春風は以て人を和し、雷霆^{らいいてい}は以て人を警め、
霜露は以て人を肅し、氷雪は以て人を固くす。
風雨霜露も教に非ざるは無し。

とは、此の類を謂ふなり。(『言志壘録』第85条)

「春風」は万物におだやかにさわやかに吹き、人を和ます。すなわち人の心をおだやかにする。雷鳴や稲光である「雷霆^{らいいてい}」は、その予想もしない激しい轟きから、人を警める。すなわち人の心の中に警戒の念をわき起こらせる。厳しい冷たさの象徴とも言える「霜露^{そうろう}」は人を肅す。すなわち人の心を引き締め、油断やスキの生じない慎みの心を抱かせる。自らを厳しい環境に置いて「鍛え・錬り・磨く」のには最適の環境といえるであろう。「氷雪^{ひょうせつ}」は、その堅く冷たい様子からも、人の心を固くする。すなわちより一層心を引き締め、甘えを一切とり去り、物事を堅実に取り扱う準備をする。「氷雪^{ひょうせつ}」が人間を強くするための「心の環境づくり」を象徴しているといえるだろう。

このように、自然の営みとしての「風雨霜露^{ふううそうろう}」も人間の在り方生き方の教えが内包されている。

9) 「春風」：「恕」の精神の象徴 「秋霜」：「忠」の精神の象徴 ～人間の在り方生き方の極意～

【以春風接人。以秋霜自肅。】

春風^{しゅんぷう}を以て人に接し、秋霜^{しゅうそう}を以て自ら肅む。

(『言志後録』第33条)

春風のようにさわやかにおだやかに人には接し、周りの植物を枯らしてしまうような秋の冷たい霜をたえず心の中

に置いているように、自らには厳しく、絶えず自らを鍛え・錬り・磨き続ける。

この条文は、人間の在り方生き方を自然の営みにたとえた『言志四録』の条文の中で、特に簡潔かつ象徴性の高い条文であると思われる。この条文は、簡潔性・象徴性のゆえに、人間の在り方生き方の「極意^{ごくい}」であるとも指摘できる。具体的には「敬^{けい}」の精神を象徴した条文であろう。

「春風」は、他者に対するやさしさ・寛容、「思いやり」、「恕^{じゆ}」の精神を象徴していると思われる。「恕^{じゆ}」の精神は、他者に対する思いやりの精神であり、他者に対するうやまの精神である。他者は自分と別個の存在であり、自分にはない何か偉大な物(サムシンググレート something great)がある。その何かを敬う。これが大事であろう。

「秋霜」は、自らに対する慎み・厳しさの象徴として示されている。一文字で言えば「忠^{ちゆう}」の精神を表わしている。「忠^{ちゆう}」の精神は、他者に対して己を尽くすこと意味する。他者のために己を尽くすために、自らを絶えず厳しい環境に置き、自らを「鍛え、錬り、磨き」続け、自らの人間力(具体的实际的に活用できる力量の形成を含む)を涵養し続けることが必要となる。「秋霜」は克己の象徴といえるだろう¹⁹⁾。

この条文は、簡潔性・象徴性すなわち顕在的直観性、潜在的体系性の高い条文といえよう。

10) 「艮」：「篤實輝光」 = 「君子」・「物の実有る者」の「象」

【艮爲篤實輝光。君子之象也。
物之有實者。遠而益輝。
近則狎之。不覺美也。
面月而看月。不如背月而觀月。
近花而看花。不如遠花而瞻花。】

艮^{こん}は篤實輝光と爲す。君子の象なり。
物の実有る者は、遠くして益々輝き、
近ければ則ち之れに狎^ひれて、
美なるを覚えざるなり。
月に面して月を見るは、
月を背にして月を観るに如かず。
花に近づきて花を見るは、
花に遠ざかりて花を瞻^みるに如かず。

(『言志後録』第85条)

「艮」は『易経』艮卦にみられる。「艮」は「とどまること」を意味し、「泰然として動かぬ山」とも表現されている。心も体もとどまるべき時にはとどまり、行くときは行く、すなわち動静について時宜を失わず。また目先の欲にも流されない。このような状態を指す²⁰⁾。

「君子の象」は「篤實輝光」である。すなわち君子は遠く

して益々輝くとされる。徳の高い者の真価は、ある程度の距離をおいて発揮される。それによって人々が影響力を受ける。自然の営み、「布置宜しき」姿、「按排」、すべて一定の距離を置いてその真価が明瞭になる。月に面して月を臨みみることは、月の背後、月の光を感じ、振り返って観ることにもかなわないし、花に近づいて「見る」、すなわち臨み見ること、距離を置いて花をながめること、「瞻る」、すなわちあおぎ見ることにもかなわない。距離をおいて見ることにより、月の光や月と夜空のコントラスト、花の調和的な美しさを感じ取ることができると思われる。人間関係においても一定の距離が必要である。近すぎると、その人の持つ真価が十分に発揮されないであろうし、その人の価値を理解することも難しいであろう。

11) 「清き者」(=自然)による「洗心」

【色之清者可観。聲之清者可聴。

水之清者可嗽。風之清者可當。

味之清者可嗜。臭之清者可嗅。

凡清物皆足以洗吾心。】

色の清き者は観るべく、声の清き者は聴くべく、

水の清き者は嗽くちすすぐべく、風の清き者は当るべく、

味の清き者は嗜たしなむべく、

臭の清き者は嗅かぐべきなり。

凡そ清き物は、皆以て吾が心を洗ふに足る。

(『言志叢録』第282条)

「清き者」は、自然の清き営みに象徴され、裏表のない、真実性にみちた「本物」であり、それを五感全体で感じ取ることが人間の成長にとっても有益であることが簡潔に示されている。「本物」とは裏表のない「誠」の具現化であろう。人間は「清きもの」、「本物」にふれることを通して、人間の本体の形成が進むのではないだろうか。

人間の修養とは、つきつめれば心を「鍛え、錬り、磨く」こと、換言すれば「吾が心を洗う(心の汚れを洗い清める)」ことである。自然の「清き者」に接してこそ、人間は、人間世界によって培われた自己を見つめ直し、心を洗い清め、そして人間的成長を遂げていくのであろう。自然の清き営みが人間の心を洗い、人間を再生させる。自然の「清き者」(物)は「洗心」の対象、すなわち人間の「学び」の対象といえるであろう。

IV. 考察

本小論では、佐藤一斎の『言志四録』の中で自然を取り扱った内容からいくつかの条文を抜粋し、それらの内容から人間の在り方生き方を考察してきた。

人間と自然のかかわりについて、『言志四録』の関連条文

をもとに3つの枠組みのもとに紹介・考察を加えてきた。

1つめの枠組みである自然の理から学ぶ社会の在り方では、自然の調和的営みから、人間社会の調和、また人間が自然と調和して社会を構築することの重要性を、『言志四録』の条文から指摘した。

人間は、自然の美しくも強くまた厳しく、恐ろしい有様の中にあつて、調和を図りながら生きてゆかねばならない。佐藤一斎の『言志四録』の条文から、自然の普遍の様子、自然の営みにおける現象化された普遍性・日常性と潜在化された変化性の表裏一体性、また、自然の本質について探究するとともに、人間社会の在り方への示唆を得た。

2つめの自然と人間との対比的関係に学ぶでは、関連条文から、自然と人間との対比的関係を捉えることを通して、自然のもつ力強さ、盤石さ、人間の力ではいかんともしがたい厳しさと、その一方で、人間の脆さ、人間社会の自然の力に対する無力さを再認識した。

3つめの自然から学ぶ人間の在り方生き方では、人間としての理想的な在り方生き方や求める境地を、自然の営み、四季折々の自然の様子にたとえている条文から吟味・考察した。

V. 終わりに

本小論では、佐藤一斎の『言志四録』に記述された1133条の条文の中から、自然に関わる内容や、自然と人間との関わり深い内容を抜粋紹介し、自然から学ぶ人間の在り方生き方についての考察を行ってきた。

以下には、考察をふまえての本小論の小括を行う。

自然の営みは、「誠」に象徴されるのであり、人間の在り方生き方の求める姿がみられる。「誠」は、人間が供えるべき「徳」の中核をなすべきものである。そもそも人間の備えるべき「徳」とは、全身から自然とにじみ出るものであり、何も語らず、何も具体的に行動せずとも、ただその人物と接していることにより、その接した人に、よりよい感化・影響を及ぼすものであり、その人を「心服」させることにつながるものである。そのためにも、その人物の心の中に、私欲や邪心、自分中心の意図的な心の働きのみがなされているならば、決して他者に対して良い影響を及ぼすものではない。人間の心の中で、このような私欲を中心とする人為的な作用のみが行われているならば、「心服」は到底不可能である。自然の営みのように、公平無私、「誠」を尽くした「自彊不息」を旨とする営みが求められよう。

自然から人間の在り方生き方を学んだり、また自然を人間の在り方生き方の理想としてとられたりと、自然の営みには畏敬の念が耐えない。自然は粛々と予定調和的に営まれ、時が過ぎてゆく。その中に人間が身をおいて、自然との調和的関係構築の道を探りながら、文明社会の進展を進める。自明ではあるが、21世紀の文明は自然環境との調和的関係構築なしには進展は望めない。人間が自然との調和

的一体的関係を構築し、人間が人間らしく生き抜く社会の実現が求められる。人間は人間として、自らの頭と心と体の調和的な関係性を保ちながら、この地球で生きていくことが望まれる。

地球が誕生して約46億年、その間、幾多の変化を遂げながら人類の誕生と繁栄により、今日の地球という惑星が存続している。人類の誕生は地球の歴史からみるとほんの瞬きの間にしか過ぎない。今後永久に地球が存続するかわからないが、私たち人間はこの地球に「生」を受けて、それぞれの国で人間としての「生」を全うするために日々の営みを続けている。人間が人間としてこの世に生まれ出た意義をしっかりと確認しながら、一瞬一瞬に命を燃やしながら生きている。この人間としての「生」はまさに地球上の、自然の「生」であり、生かされていることへの感謝の念をいただきつつ、自然との調和的關係の中で、自然の営みを人間としての在り方生き方の範として生きることが肝要なのである。しかしながら、人間はこの根本的、本質的な意義を時として忘れ、時として気づかずに、人間中心があたりまえとして生きている。このことを反省的にとらえながら、いわゆる「自反」しながら、先き行き不透明な現代社会を、前を向いて一步一步力強く生きなければならぬであろう。

注及び主要参考文献

- 1) この本小論にて紹介する『言志四録』の条文の白文表記並びに書き下し文について、加えて条文の大意及び条文に関連する語義の解釈については、岡田武彦監修『佐藤一斎全集』第11巻、(明德出版、平成3(1991)年)、第12巻(明德出版、平成5(1993)年)を底本とした。
- 2) 江戸時代には、今日使われている「自然」概念として「自然」という言葉は使われていなかった。元来「自然」という言葉は「状態」や「存在」を表わす意味で用いられていたものであり、森羅万象をさす「天地」、「万物」とは区別されていた。その世界が「自然」という文字で表現されるようになるのは、近代前後に nature の訳語として「自然」をあてはめて以後のものである。(石毛忠他編『日本思想史辞典』山川出版社、平成21(2009)年、421頁。)『言志四録』には、「自然」という言葉はみられるが、山川草木の総称としての使用はみられない。本小論においては、「天地」、「万物」、「造化」等を今日の「自然」概念に包含し「自然」という表現に統一して、それらに関係のある条文を取り上げる。
- 3) 人間の在り方生き方を自然の有り様や営みにたとえての考察は、中国の四書五経や漢詩文をはじめ、数多く見られる。佐藤一斎の『言志四録』の中で、自然と人間とのかかわりに焦点をあてた先行研究としては、山崎道夫著『佐藤一斎』(シリーズ陽明学・24)(明德出版差社、平成元年)がある。この書の中で、山崎氏は、「自然と人間観」の章を設けて、『言志録』第91条、『言志後録』第140条、『言志後録』第155条、『言志叢録』第35条、『言志叢録』第44条、『言志叢録』第155条、『言志叢録』第314条を取り上げるとともに、余説を設けて関連条文を含めて解説している。
- 4) NHK テレビ番組「あの人に会いたい」平成29(2017)年10月14日放送。
- 5) たとえば明治期にあつては、新渡戸稲造の『修養』(実業之日本社から明治44(1911)年発行)をはじめとする文献に数多く引用されている。
- 6) 教育学をはじめとする学界、剣道を始めてとする武道界、野球をはじめとするスポーツ界等、各界の人物が『言志四録』をそれぞれの分野における修養の糧としている。また具体例は挙げないが、21世紀の現代社会に生きる人間のための、自己啓発書に活用されている書は枚挙にいとまがないほどである。
- 7) 川上正光全訳注『言志四録』(一)講談社学術文庫、昭和53(1978)年。
- 8) 高瀬代次郎著『佐藤一斎と其門人』南洋堂、大正12(1923)年、540~542頁。
- 9) 84歳の肖像画 岐阜県恵那市岩村町歴史資料館所蔵。
- 10) 山崎道夫著『佐藤一斎』(シリーズ陽明学・24)(明德出版差社、平成元(1989)年、11頁。
- 11) 「思ひ邪無し」は、島津斉彬が『論語』為政第二の一節から引用したと言われている。
- 12) 岡田武彦著『ヒトは躰で人となる』登龍館、平成13(2001)年、26頁。
- 13) 岡田武彦前掲書、30頁。
- 14) 吉田豊篇『武道秘伝書』徳間書店、昭和43(1968)年、50-51頁。
- 15) 吉田豊篇前掲書、201頁。
- 16) 岡田武彦前掲書、50頁。
- 17) 「講道館 柔道資料館」パンフレットに記載されている文章より引用した。
- 18) 『礼記』礼器篇に「天道は至教なり。聖人は至徳なり」とある。また「風雨霜露も教に非ざる無き」は『礼記』孔子問居篇「天に四時有り、春夏秋冬、風雨霜露、教に非ざる無し」とある。
- 19) 『言志後録』第33条に関する内容の分析と今日的意義については上寺康司「先人に学ぶ教育実践の知恵」(広岡義之編著『はじめて学ぶ教職論』ミネルヴァ書房、平成29(2017)年、182~184頁)に詳述しているので、参照されたい。
- 20) 「良」については、松枝茂夫・竹内好監修、丸山松幸訳『易経』(中国の思想VII)徳間書店、平成8(1996)年、152-153頁を参照した。